# ニューヨーク社交界の指南役ワード・マカリスター
## ——『無垢の時代』におけるその描かれ方——

大　塩　真夕美

### はじめに

南北戦争後の19世紀後期、ニューヨーク社交界は「アスター夫人」と呼ばれたキャロライン・ウェブスター・シェーマホーン・アスター（Caroline Webster Schermerhorn Astor, 1830-1908）を中心に、数々の社交が行われていた。社交界とは、金持ちがただ社交を繰り広げるだけの世界ではなかった。先祖代々の富を守るために、古くからニューヨークに暮らす伝統派と呼ばれた人々は、自らの富を顕示することで自分の存在意義を周囲に示し、一代で成功し富を得て新しく社交界に加わろうとする新興成金をけん制していた。社交界に興味を示さない夫のウィリアム・バックハウス・アスター・ジュニア（William Backhouse Astor Jr. , 1829-1892）に代わって、アスター夫人の傍に立ったのが、社交界の陰の実力者といわれたワード・マカリスター（Samuel Ward McAllister, 1827-1895）であった。

歴史家ジャスティン・キャプランはマカリスターをアスター夫人の取り巻きであると同時に食道楽であったと評価している[1]。また歴史家エリック・ホーンバーガーは、「当時人々は彼を娯楽とワインと食事の権威だと思っていた[2]」と語っている。しかし、一方で、社交界のほとんどが、彼を「怖気づくことのない、ただのスノッブ[3]」だと思っていたという。つまり、ワード・マカリスターは人々から、食やワインなどの知識においてはある程度の権威者であると評価されていたようであるが、それ以上どんな存在であるかという点においては疑問があると思われていたようだ。

作家イーディス・ウォートン（Edith Wharton, 1862-1937）は、自らも社交界の一員であり、後にその生活を描いた女流作家として成功を収めた。ウォートンは幼少期、家族と共にヨーロッパに滞在したが、1872年、10歳でニューヨークに戻ってきている。ニューヨークに戻ってからの一家は、当時のマンハッタンの中心地、西23丁目のブラウンストーンを邸宅とし、夏には当時の社交界の人々の避暑地であったニューポートの別荘で過ごすという典型的なニューヨーク社交界的生活を送った。くしくもマカリスターがアスター夫人と出会い協力して社交界を盛り立て始めたのが、ウォートン一家がニューヨークに戻ってきた同年1872年であった。つまり、実際に、アスター夫人、ワード・マカリスター、そして作家イーディス・ウォートンは同時代のニューヨーク社交界を生きていたのだ。彼らは、マカリスターが主催したパトリアーク舞踏会などで顔を合わせていたに違いない。事実、ウォートンの父方の祖母はアスター夫人の実家であるシェーマホーン家からウォートン家に嫁いできた女性であった[4]のだから、親戚関係という点において、個人

的に顔を合わせていた可能性もある。万が一、実際に顔を合わせてないとしても、社交界の一員であったウォートンには、アスター夫人に関する話はもちろん、その右腕であったマカリスターに関する様々な話が耳に入ってきたであろう。

ウォートンは、代表作『無垢の時代』(*The Age of Innocence,* 1920) に2人の社交界の指南役を登場人物として描いている。ニューヨーク社交界の家系に関することなら全て知っている老年のシラートン・ジャクソンと、ニューヨーク社交界の「作法」の最高権威者とされたローレンス・レファーツである。ローダ・ネイサンが、「ジャクソンとレファーツという人物を作り出す時に、ウォートンはワード・マカリスターを明らかに思い描いていた[5]」と指摘している通り、ジャクソンとレファーツの描写はマカリスターと類似する点が多い。作品の中で、ジャクソンとレファーツは、ニューヨーク社交界において重要な位置を占めている。彼らの存在があるからこそ、社交界はその姿をとどめている印象がある。彼らがいるから、人々は知っておくべき必要な情報を知ることができ、また、必要なマナーや流行をおさえることができた。ウォートンは社交界を舞台にした作品を描く際、自分がその目で見てきた実際の社交界を念頭に置いたことは間違いない。もちろん実名を出したり、本当に起こった重要な事件や出来事をそのまま描くことなどはしなかったが、実際に起こったことを基にして、社交界の姿を描いたのがウォートンである。そう考えると、私たちは、『無垢の時代』に描かれる社交界の指南役ジャクソンとレファーツの姿を追うことで、当時の社交界がマカリスターをどう思っていたのか知ることができるのではないか。

これまでに、日本の研究でニューヨーク社交界について詳述して研究されているものはほとんどなく、さらに、ワード・マカリスターについては皆無と言える。現在、「格差」というキーワードはあらゆる分野に渡って使われている。「格差社会」を始め、「食料格差」「学歴格差」「経済格差」など、社会が存在する限り、その上層にいる者、また、その下層にいるものは決してなくならないのもまた事実である。労働者を始め、社会の下層の研究は国内外に多く存在する。一方で、これまで特に国内でほとんど研究されていない富裕層の研究をすることで、上層の人々が何をし、何を感じていたのかを知り、それがその下の層にどのように影響したのかを考えることができるのも事実だ。

ニューヨーク社交界の指南役ワード・マカリスターがニューヨーク社交界からどのようにみられていたのか、それをイーディス・ウォートンの『無垢の時代』から考察するにあたり、まずは、ウォートンと社交界の関わりについて述べる。その後、ワード・マカリスターと社交界の関わりを観察する。そして、『無垢の時代』に描かれるマカリスターの存在、社交界の人々がマカリスターについてどのように思っていたのか、そしてマカリスター自身が社交界をどのように考えていたのかを読み説いていく。

## 社交界の作家イーディス・ウォートン

1862年、イーディス・ウォートンはニューヨーク市に生まれた。父方も母方も、ニューヨーク社交界の伝統派の家柄で、劣悪な環境の集合住宅「テネメント」が密集し、移民が多く暮らすロウワー・イーストサイドの不動産を収入源に生活をしてきた人々であった。一家は1866年から6年間、ヨーロッパで生活し、その間にウォートン自身は、滞在した国の言語を学び、物語を創作

し始めたという[6]。1872年にニューヨークに戻り、ニューヨーク社交界での典型的な生活を始めた。1878年、社交界デビューした16歳で、彼女の詩の一つが『アトランティック・マンスリー』誌に掲載された。ウォートンの作品が初めて世に出た瞬間であった。1885年23歳で結婚するも、特に愛情を抱くことのできない相手であった。その生活の反動からか、彼女の創作活動は勢いを増す。1897年には処女作となる『家の装飾』(*The Decoration of Houses*) を出版し、これを皮切りに多くの小説を発表。1905年には長篇小説の第1弾となる『歓楽の家』(*The House of Mirth*)、1913年に『お国の慣習』(*The Custom of the Country*) を発表した。これらの作品は1920年に発表される『無垢の時代』と合わせニューヨーク3部作といわれることとなった。

『歓楽の家』を世に送り出してから15年後の1920年、当時58歳となっていたウォートンが完成させたのが、『無垢の時代』であった。当初ウォートンがこの作品のタイトルを *Old New York* と考えていたことからもわかるように、この作品の舞台は1870年代のニューヨークである。当時のニューヨーク社交界は新興成金が流入する直前であった。まだ新興成金という混ぜ物が流入しない、ある意味「無垢」(innocence) な状態を保った社交界を舞台に伝統派の人々を中心に据え物語は進行する。当時の社会規範を考えると、家柄的にこれ以上ない結婚相手であるメイと婚約を発表した伝統派の家系の長男ニューランドは、ヨーロッパでの伯爵との結婚生活から逃げて故郷に戻ってきたメイの従姉であり、幼き頃には一緒に遊んだエレンに次第に惹かれてゆく。二人の気持ちは徐々に通っていくのだが、彼らが生きる社会規範、そして彼らを取り巻く社会が彼らを結びつけることはありえなかった。結果、エレンはニューランドを受け入れることはなく、ニューランドはメイとの結婚生活に自分の身を沈めてゆく。

メイは一見純粋に見える。「オールド・ニューヨークで純粋培養されており、その時代の社会のニーズに応える[7]」存在であり、「安全で守られたニューヨーク社会を体現[8]」する存在であった。しかし一方で、したたかな人間としても読み取れる。まだ婚約期間のうちに、ニューランドから激しいキスをされた時には、それに動揺し、はにかむ表情を見せ、性的には初心かもしれないが、その性という武器を使って、ニューランドとエレンの関係を最終的に崩壊させるなど、決して純粋無垢とはいえない人間である。しかし、それは彼女の生まれ育った環境が彼女に教えたものであった。

メイの従姉妹であるエレンはヨーロッパという世界を知り、一度は結婚生活も体験し、そこから逃げ帰るという常識に囚われない行動をしている人間だ。実際に彼女の社交界での行動やニューランドとの会話からも彼女は社交界の他の人間とは一線を画す存在であることが読み取れる。彼女は自分が正しいと思うことを口にし、自分の頭で考え行動する。結婚生活や、元秘書の存在から彼女に性的な純粋さは見られないが、社会的には、自分の信念を貫くという点において純粋であるといえるだろう。

一方、ニューランドは未熟である。自分の感情が全てとなり、その感情を持つ自分が存在する社会が見えていない。彼にとっては、メイが自分の幸せを守るためについた社会的な嘘も、社会の現実を理解しているエレンが二人の未来のために下した決断も、根底では理解できていないのではないか。本人は十分に大人のつもりでも、ニューランドは成長しきれていない。その点において、性的にも、社会的にも双方において純粋なのは他の誰でもないニューランド自身なのかもしれない。

『無垢の時代』の「無垢」とは何を意味するのか。前述のように、新興成金の流入する以前の伝統派だけの社交界の「混じりけのなさ」を意味するのか。メイが体現するまだ何も知らない若き娘の「初心さ」を意味するのか。エレンのように、まっすぐに自分の信念に従って、社会規範を気にせずに進む「まっすぐさ」を意味するのか。あるいは、ニューランドの、人間の裏を読もうとしない、表層だけを見てそれを信じてしまう「浅はかさ」を皮肉を交えて表現しているのか。「無垢」は「白」を連想し、一般に「白」は良いものであると考えられる。しかし、ウォートンにとっての「無垢」は称賛されるものではなかったのではないか。ウォートンは、『無垢の時代』において、徹底的にニューヨーク社交界の裏に潜む人間の傲慢さなどを描いた。彼らは家柄で人を判断し、多様性を排除しようとした。一度結婚すれば離婚は許されず、女性は男性の所有物であった。ニューヨーク社交界には、暗黙の徹底的な規律が存在し、それを忠実に守りながら人々は自分の社交界での地位を確保した。「無垢」さは時として、他を排除し、自らの優越性を際立たせる。その社交界の規律を体現したのが、シラートン・ジャクソンとローレンス・レファーツという登場人物である。社交界の家系やニューヨーク社交界のここまでの歩みの生き字引的存在のジャクソンと、社交界のマナーを語らせたら右に出る者のいないレファーツの存在はニューヨーク社交界に不可欠なものとして描かれている。自らを取り囲むニューヨーク社交界を、作品において、冷静な視点で描いてきたウォートンである。ジャクソンとレファーツの描写にも、モデルとなる実在の人物がいた。それが、1870年代からアスター夫人のそばで、その手腕を発揮したワード・マカリスターだった。「娯楽での成功が、社会的成功の階段である[9]」をモットーにしたマカリスターは、自分の持つすべてをアスター夫人に指南することで、社交界の中心へと、のし上がった。次に彼が、いかにしてアスター夫人の片腕になったのか、見ていくこととする。

## ワード・マカリスターが社交界の指南役になるまで

ワード・マカリスターは1827年、ジョージア州サバンナで、裁判官の父を持つ裕福な家庭に生まれ、幼い頃から、上質な生活を営むこと自体が自分の仕事であると感じていた[10]。弁護士を務める兄を頼ってサンフランシスコに行くが、法律を勉強するよりも、兄の顧客に対する営業、つまり食事会やパーティーの企画を得意とした。その後、ヨーロッパやアメリカ各地で社交を学び、特にフランスでは社交や食材の知識も手に入れた。フランス南西部の町ポーには2年間滞在し、この地で、晩餐会の開催の仕方を学んだという[11]。1850年代中期にはジョージアの億万長者の娘であったサラ・T・ギボンズと結婚し、彼女の実家が所有するニュージャージー州の土地を手に入れた。結婚後、ロードアイランド州ニューポートに移動し、各地で得た知識を披露することになる。ここでの彼の活躍が、彼のニューヨークへの布石となった。ニューポートはのちに、社交界の人々の夏の避暑地となるが、この頃のニューポートではまだ派手な社交はなかった。彼は、羊を放牧し、生演奏のバンドを雇うなどして、社交界の人々が満足できるピクニックを催した[12]。その結果、彼のニューポートでの活躍は瞬く間にニューヨーク社交界の人々の話題となり、ニューヨーク進出への足掛かりとなった。

マカリスターには、社会的に認知されたいという強い欲望があった。そして、自分の持つ知識とともに、彼には自分への絶対的自信があった。例えば、彼は1890年に出版することとなる著書

で「娘たちをどのようにしたら社交界にデビューさせられるのかアドバイスするのに、その母親たちからお金をとったら、私は大金持ちになれるであろう[13]」と豪語している。また、ニューヨークに来てからのマカリスターは用意周到にその存在を知らしめた。1859年には、その当時、全米一の金持ちであったコーネリアス・ヴァンダービルトのために夕食会を開く。マカリスターの準備した夕食に大変満足したヴァンダービルトからは「これだけの素晴らしい食事を用意できるのなら、ニューヨークで生きていくことに不安はない[14]」とお墨付きをもらった。1870年には当時社交の中心となっていたレストラン「デルモニコズ」の最も人気のあった「青の間」で小規模の舞踏会をたびたび開催した。この舞踏会は、徐々に人気が出て、そのチケットは入手困難だったという[15]。そして、より高いところを目指すマカリスターは、1872年に「パトリアーク」という組織を作った。これは、マカリスターが始めることとなる「パトリアーク舞踏会」を開催する際に、どの人間を招待するのかを決めるための組織であった。25名のメンバーがおり、それぞれが舞踏会の際には7名ずつを招待するという制度であった。招待制とすることで、マカリスターはその舞踏会自体に、排他性をもたらした。マカリスターがパトリアークを組織したのは、それによって、社交界をまとめるためだった。そこへの招待はニューヨーク社交界への足掛かりとなり、毎回招待されることが社交界での安定した地位を意味するようになった[16]。しかし、女性を中心とするニューヨーク社交界において、マカリスターには社交界の中心となるだけのカリスマ性を持ち、人々が憧れる存在となる女性が必要であった。そこで、彼はアスター夫人に白羽の矢を立てた。1872年にアスター夫人に初めて会った時、マカリスターは、「出逢ってすぐに彼女の才能にきづき、彼女が社交界のリーダーとなるだろうし、その価値があると感じた[17]」と述べている。社交界に興味を持たない夫の代わりに彼女の社交のエスコートをする人物を探していた夫人と、自分の代わりに表舞台に立ち、社交界を統率する女性を探していたマカリスターにとって、1872年の出会いはまさに運命であったのだ。

マカリスターは夫人にとって、助言者であったとはいえ、従僕のような存在であったという。1874年にパトリアーク舞踏会が初めて開催され、また同年、毎年恒例となるアスター夫人の晩餐会も開催されるようになった。その両方をマカリスターがプロデュースした。マカリスターは、アスター夫人が、彼を召使や秘書のように扱っても気にしなかった。彼にとってはアスター夫人の存在こそが、彼を社交界の内側にとどまらせる存在であったからだ。アスター夫人からどんな扱いを受けようとも、彼女の傍にいることは彼の社交界での地位を保証したのだった[18]。

マカリスターが社交界で行ったこととして有名なのが「フォーハンドレッド（400)」と呼ばれた社交界名簿の作成であった。これは、彼がアスター夫人と開催していた毎年恒例の「アスター夫人の舞踏会」への招待客の人数であった。アスター夫人の邸宅にある舞踏室の定員が400名であることから、400名ほどに招待状が送られたというのが事実だが、マカリスターによれば、ニューヨーク社交界の真のメンバーと呼べるのは400人で、それ以外は、社交界に安定した基盤を置く人々ではないということであった[19]。ニューヨーク社交界の人々は、この舞踏会の招待を得るために、必死で社交し、また、一度この招待状を手にすると、毎年この招待状をもらえるよう、必死で努力した。マカリスターは、この「フォーハンドレッド」のように、ニューヨーク社交界に排他性をもたらし、その排他性を維持することで、社交界の優越性と神秘性を維持したのだった。

## マカリスターが見たニューヨーク社交界

自らがヨーロッパで身につけた社交術を武器に、社交界の人々の避暑地ニューポート、そしてそれを足掛かりにニューヨーク社交界で、社交界の指南役となったマカリスターであったが、彼自身はジョージア州サバンナ出身の裕福な家柄であったとしても、ニューヨークの確固たる基盤を持つ家柄の出身ではなかった。彼は、自らが身につけたマナーと社交術を持つことで、自らの出自の劣性を越えたのだ。

また、マカリスターの人生の信条は「決して自分だけの判断で物事を決めないこと[20]」だった。常に人の意見に耳を貸すことが大切だとわかっていたので、パトリアーク舞踏会を開催する際にも、まずは自分を除いた3名の紳士に特別委員会を組織させ、その組織が、マカリスターを含む25名のパトリアークを選出し、その25名が舞踏会開催のたびに、自分を含めた女性4名と男性5名までを招待できるというシステムにした[21]。そのため彼は、社交界に君臨している君主だという人々からの憶測を否定し、自らは社交界の持つ排他性を体現しているだけだと言い続けた[22]。排他性こそが、マカリスターが最も社交界形成において大切にしたものであった。パトリアーク舞踏会にしても、マカリスターがそのほとんどの協力をしたアスター夫人の舞踏会にしても、招待状を受け取る、つまり、「選ばれる」ということが名誉であった。招待状を初めて受け取るということは、ニューヨーク社交界に認められたことを意味し、それを毎回続けて受け取ることは、社交界での地位の安定を意味した[23]。

マカリスターにとって、ニューヨーク社交界の排他性を維持することは大変重要で、排他性があるからこそ人々が憧れる存在で居続けられると信じていた。そして実際、排他性を持つ社交界を維持することは崇高なことであり、そのメンバーでいるということは簡単なことではないと思っていた。マカリスターは「社交界とはそれ自体が職業である。十分な余暇（leisure）と趣味（taste）を持ち合わせる人間だけが、社交界が求める水準をもち続けることができる[24]」と話しており、ただのお金持ちだという理由だけでは社交界に認められることはないことを常に強調していた。実際、以下のように続けている。「何人もの人が近年では、毎シーズン社交界に認められるが、すぐに消えていく。社交界が必要とする会話やマナー、ユーモアを持ち合わせていない人や、人々を楽しませることができない人は、ここから脱落していくのです。[25]」

## 社交界が見たマカリスター

1870年代からニューヨーク社交界で頭角を現し始めたマカリスターは、アスター夫人の指南役となることで、社交界の中心人物として名をはせていった。マカリスターの周りには多くの社交界に入りたい人々が群がっており、毎日のように娘をニューヨーク社交界にデビューさせたいと思う母親たちからマカリスターに連絡があったという。そのたびに、真摯ではあるが、確実な約束はしないよう対応したというが、先述のように、自伝において、「その母親たちから相談料を取っていれば金持ちになれたであろう」と言っていることからも、彼を頼りにする夫人たちがどれほどいたかは簡単に想像できよう。実際、マカリスターの死後、社交界の指南役となったハリー・

レーラの妻であるエリザベスは「彼には品位があり、どんなに信心深い聖職者でさえ、彼のような熱心さで信者と向き合うことはないだろう[26]」とマカリスターの功績をたたえている。

長年にわたり、マカリスターの周りは「社交界に入りたい人々」であふれていたし、なにも「社交界に入りたい」と思う人でなくても、「マカリスターという人間を一目見たい」人は大勢いたらしい。世間では、新聞報道などの影響も手伝って、マカリスターという人物はフォーハンドレッドのメンバーであり、社交界の君主であると考えられていたのだ。ある時、マカリスターを含む社交界の人々が列車で旅行することがあった。テネシー州の、とある駅には止まらずに通過するだけだったにも関わらず、人々が馬に乗って駅に駆け付け、そこを通り過ぎる列車に乗ったマカリスターの姿を一目見ようとした[27]。

ニューヨーク社交界の内部にとどまらず、その周辺、さらには、新聞などメディアの影響で、社交界とは何の関わりもない市井の人々にまでその存在を知られ、興味を持たれたマカリスターであったが、もっと有名になりたかった彼は、さらにメディアを利用して、セルフ・プロデュースを始めた。1880年代後期には、ニューポートに所有したコテージをオフィスとして使い、毎朝9時から10時の間をプレス用の時間とした。ヘラルド紙の記者は「マカリスターはマスコミが好きで、どのように扱うかわかっていた[28]」と振り返っている。一方、社交界の人々は、マカリスターとマスコミとの距離は近すぎると感じ、その関係性を不安視した。

そして、その不安は1890年にマカリスターが自伝を発表したことで、見事的中することとなった。『私が見た社交界』(*Society As I Have Found It,* 1890) と題されたその本には、本来であれば、社交界の内部でのみ留めておくべき様々な醜聞が描かれた。もちろん仮名を使用し、本人を特定できないような配慮はされていたが、当時の社交界の人々は新聞の1面を賑わすことも多く、熟読すれば、それが誰のことだかわかってしまう内容に、社交界の内部からはひどく反発をされた。この結果、マカリスターが想像した以上に、この本は社交界内部でのマカリスターの地位を傷つけた。

この自伝が刊行される前から、すでに社交界の人々は、この出版の噂を知っていた。前年1889年のセレモニアル舞踏会のために、マカリスターは壮大な計画をしていた。けれど、組織委員会は、マカリスターを舞踏会から追放した。委員長のスタイヴェサント・フィッシュは以下のように言い放った。「ところで、マカリスターって誰だ？マカリスターは私たちの世話役、司会、あるいはケータリング業者くらいでしかない。私たちにとっては、彼を受け入れることはなく、もう彼に仕事を依頼しないと申し上げた。マカリスターは用無しになった使用人だ。以上。[29]」この発言を聞いたマカリスターは、舞踏会の日を、ニューヨークではなくワシントンDCで過ごし、新聞で舞踏会の内容を確認し、「あんなひどい舞踏会、関わらなくてよかった[30]」とマスコミに漏らしたという。その後も、マカリスターは虚勢を張って、強気な発言を繰り返し、「フォーハンドレッド」がどのように構成されているかをマスコミに暴露したりした。マスコミや市井の人々は、彼の強気の発言を面白がったが、社交界での評判は失墜し、彼の名前 'Ward McAllister' をもじって、"Ward Make a Lister[31]" とからかわれるほどになった。

それから5年後、1895年1月31日、ニューヨークは社交界シーズンの真っ盛りで、その晩もチャリティ舞踏会が開催され、多くの社交界の人々が集まっていた。そんな晩にマカリスターは亡くなった。翌年に5番街842番地に新しい豪邸が完成する予定であったアスター夫人は、マカリス

ターが亡くなった翌日に、約40年間住み続けた350番地の豪邸での最後のアスター夫人晩餐会を開催することとなっていた。マカリスターを右腕として、共に歩んできたアスター夫人が、喪に服す意味で、舞踏会をキャンセルするかどうか、社交界の人々は密かに気にしたが、その舞踏会は予定通り行われた。

5日後にニューヨークのグレース教会で執り行われた葬儀には、多くの人々が駆け付けた。しかし、そのほとんどが有名人マカリスターの葬儀を見てみようと集まったやじ馬ばかりだった。アスター家からは誰一人参列せず、マカリスターがいたからこそ、社交界へ入ることができたヴァンダービルト家の人間もいなかった[32]。

## 『無垢の時代』に描かれるジャクソンとレファーツ

自らの社交界に関する知識を人々に提供することで、社交界の地位を確立し、アスター夫人の右腕となることで、それを継続し、しかし、自らの価値を見誤り、最後は社交界に見放されたマカリスターであったが、同時代のニューヨーク社交界の内部の人間として存在していたウォートンは彼をどのように見ていたのか。自伝『振り返り見れば』には、特にマカリスターに関する記述はない。しかし、『無垢の時代』に描かれる2人の登場人物を探っていくことで、ウォートンが、マカリスターにどのような印象を持っていたのか、考えることができるだろう。ここからは、『無垢の時代』において描かれるシラートン・ジャクソンとローレンス・レファーツという二人の社交界における権威者を読み解いていく。

まずは、「過去50年間、平穏なニューヨーク社交界の表面の下でくすぶっている醜聞や秘密の大部分を記録し[33]」ていることで人々から一目置かれる存在であったシラートン・ジャクソンからみていく。彼はすでに老年であり、社交界で何か噂になるような出来事が起きると、様々な人から連絡が入り、食事の誘いを受ける。その食事をしながら、人々は、彼の口から噂の真相を聞きたがるのだ。彼は「収集化の忍耐力と博物学者の技術[34]」を持ち、社交界に流れる数々の噂を収集する。また、時には、会話の中で「外国育ちのオレンスカ夫人はそういうことにはうるさくないのかもしれない[35]」などと、ほのめかしの術を使うことで、上手に相手から正確な情報を聞き出すこともある。しかしながら、彼は知りえた事実を簡単に喜んで口にするタイプではない。彼の「鋭い道義心が簡単に秘密を洩らさない[36]」のだ。だからこそ、この彼の思慮深さは、彼が知りたいと思うことを知る際に有効に働く。人は、彼が簡単に人に話さないとわかっているから、彼らの評判に関わることでさえ、ジャクソンに話してしまうのである。彼の口から伝わる事実は、なにも悪いことだけではない。例えば、ニューランドとメイの婚約から結婚に至るまでの様々な成り行きも、ジャクソンと彼の妹によって、社交界の隅から隅にまで伝わった[37]。

一方、「どんな時に夜会用の服に黒のネクタイを用いるのか、そうでないかを教えられるのはラリー・レファーツだけだ[38]」と称賛され、ニューヨーク社交界の作法の最高権威者とされたのがローレンス（ラリー）・レファーツである。ウォートンはレファーツの外見を、「彼の禿げあがった額の傾斜や見事な金髪のひげの曲線、エナメルの靴を履いた長い脚。こんなに背が高いのに、これほどの優雅さで振る舞える人…[39]」と描写しているが、これはマカリスターの外見と一部合致する。マカリスター自身は、「彼の太鼓腹、禿げあがった額、細い口髭、そして、ヴァン

ダイク風のあごひげと高級なのに合っていない服からわかるように、ドローイングルームの独裁者というには無理があった[40]」とあるように、決して高身長でも長い脚を持つわけでもなく、身長も低く、おなかも出ていた。しかし、彼は後退した生え際や、立派に生やした口ひげを自ら自慢としていた。つまり、作中のレファーツほどは、完璧な容姿を持っていなかった。しかし、ウォートンは、作中の人物を描く上で、実在のマカリスターよりも、より「作法の権威者」らしく見える人物描写をしたと考えられる。また、マカリスターが「高級なのに合っていない服」を着ていたという事実からは、彼が、現実の姿よりも、自らをより高く、より裕福であるように見せようとしていたことが言える。

生涯独身を通していたと描写されるジャクソンに対して、レファーツは社交界の「遊び人」として描かれる。「ラリーは最近、道楽の度が過ぎて、村の郵便局長の妻と関係している[41]」とか、事あるごとに、エレンと親密になる機会をうかがい、結果的には振られたり[42]、現在はタイピストと不倫中のため、「ねえ、君、明日の夜、一緒にクラブで食事するということにしといてくれ。ありがとう、恩にきるよ[43]」などと、すれ違いざまに、滑らかな口調でニューランドに言ったりする。このような理由から、ニューランドはレファーツを「軽蔑に値する人間と見なして[44]」おり、意図的に物事に干渉し、問題を起こす人物だ[45]と考えている。

このように、ウォートンはジャクソンとレファーツを描くことで、マカリスターを描写したと思われる。マカリスター自身は、著書で社交界の内部を描き、社交界のひんしゅくをかい、反旗を翻された。同じ時代にニューヨーク社交界で生活していたウォートンは、このことを見聞きしたはずである。マカリスターは、社交界で大変重要な役割を担い、アスター夫人の右腕として、手腕を披露してきた。しかし、晩年の失敗により、人々から背を向けられ、孤独な死を迎えた。だからこそ、ウォートンは、ジャクソンとレファーツという二人の人物を登場させ、一人の存在を二分することで、マカリスターのような社交界の指南役の存在を人々にしらしめたのではないか。社交界は、指南役の存在なしには、成り立つことがなかったから、その存在なしには、社交界を描くことはできなかったのだ。

しかし、一方で、小説の読者の視点から考えたとき、マカリスターのように、早口ですべてをまくしたてるような人間は、登場人物には不向きである。あくまでも、少しのほのめかしを投げかけることで読者に考える余韻を与え、想像する興奮を与える人物でなければ、小説の要とはならない。ほのめかしを多用するジャクソンを描くことで、ウォートンは社交界の指南役を描いた。そのような役目の人間がいるからこそ、社交界の人々は様々なことを十分知ることができたし、適切なアドバイスを受けることもできた。ただし、ウォートンはジャクソンを描く際にマカリスターの失敗を念頭に置いた。口の軽い人間は、社交界の人々に信用されない。社交界の神秘性や排他性を保つには、社交界の内側での秘密はそこに留めなければならないからだ。そのため、ジャクソンは、簡単に秘密は洩らさない人物として描かれた。その結果、たった20年ほどでその地位から引きずり降ろされたマカリスターと違い、ジャクソンは過去50年のニューヨーク社交界の醜聞を記録できたのだ。

また、レファーツを描く際には、マカリスターの博識を参考にした。服装に関する事細かな指摘、作法に関する執拗なまでに細かいアドバイスなど、外見の類似点と共に、あらゆる人間の外側の部分を指摘し、指南し、コントロールしようとするマカリスターの姿はレファーツを通して

表現された。自らの富を巧みに服装や外見に表して人々に知らしめることは、社交界での地位を維持するために大変重要であったからだ。また、女性に関しても、妻を見下していた点が似ている。レファーツの妻は、夫が家庭の外で女性と遊んでいるときにも、「ローレンスはとても厳格な人間なんですの[46]」と言うような、男性にとって好都合な女性であった。マカリスター自身も妻のサラは社交に興味を示すことのない女性だった。そのため、彼女はマカリスターがニューヨークで社交界の中心にいる時も、自宅にこもり、地味な日々を送っていたという。

ジャクソンの描写に関しては、マカリスターの二の舞にならぬよう、注意を払い、社交界の指南役の重要性を描き切り、レファーツの描写に関しては、マナーや物事の細部にこだわりすぎるいやらしさや、女性に対する蔑視感を描くことで、マカリスターの厭らしさを体現させた。ウォートン自身が作家として生きた女性であり、女性であるという理由だけで、男性の作家とは違う困難に直面していたであろう。あえて女性を蔑視する人物を描写し、読者の眼前に晒すことで、その窮屈さや息苦しさを、読者に伝える意図も垣間見える。

ニューヨーク社交界で生活をしたウォートンは、社交界でのマカリスターの存在は認めるべきものであったと考えていた。だからこそ、ウォートンは、自らが描く社交界にも、指南役を登場させた。マカリスターが演じた社交界での役割を体現させる人物を描くことで社交界のルールを読者に伝え、一方で、社交界に最後には捨てられたマカリスター自身は描かないよう、工夫を加えて作品を作り上げたのだろう。

## おわりに

オスカー・ワイルドは社交界について、かつてこう語った。社交界とは「そこにいることはつまらないけれども、そこから脱落することが悲劇となる場所である[47]。」事実、ワード・マカリスターがアスター夫人と共に形成したニューヨーク社交界では、マカリスターが信仰する「排他性」を非常に重視したために、人々は舞踏会や晩餐会の招待状を受け取ることに、またそれを毎回受け取り続けることに必死になった。しかし、いざその一員になってみると、実際に心の底から日々の社交を楽しんだ人は多くなかったという[48]。舞踏会がどんなに煌びやかで美しく、そして晩餐会で提供される料理がどんなに繊細で美味しくとも、人々にとっては、そこに居続けるプレッシャーの方が強く、とてもそれを楽しめる状況にはなかったに違いない。

そして、マカリスターこそが、自分が創ったニューヨーク社交界で、その「排他性」のためにそこから脱落し、悲劇の最期を遂げることとなった。もともとアメリカ南部ジョージア州サバンナの裕福な家庭出身であったマカリスターは、ニューヨーク社交界を牛耳る伝統派の家柄出身ではなかった。だからこそ彼は、実家の財力を使って、ヨーロッパ各地で過ごし、後ろ盾のない自らに知識とマナーという鎧を着せることで、ニューヨーク社交界に入っていった。自らの職業を「社交界」と言い切るほどの鎧を身に着けた彼は、ニューヨーク社交界で求められ、アスター夫人の黒子になることで、飛躍を遂げた。しかし、彼は物語の背景にはなりきれなかった。周りに信仰者が増えれば、自分の力を過大評価してしまう。ニューヨーク社交界の排他性は、マカリスター自身が最も重視したものなのに、それをマスコミに話すことによって、自ら、崩してしまっていたのだ。その行いは、社交界の内部の人々からすれば、「造反」であった。そのため、イー

ディス・ウォートンは『無垢の時代』を描く際、シラートン・ジャクソンという老年の指南役には、その口の堅さを表現し、マカリスターがそうであったらという理想を体現させた。また、ローレンス・レファーツには、マナーやファッションについては右に出る者がなく完璧であった様を描写する一方で、マカリスターを彷彿とさせる危なっかしさ、軽薄さを体現させた。だからこそ、作品の中でレファーツは、社交界の人々から親しまれながらも、どこか信用のできない人間であるという印象を抱かせる人物として描かれる。また、時代が流れる中で、ニューヨーク社交界は、娘たちをヨーロッパの貴族と結婚させることで、自らにはない「血統」を手にしていた。そのような時代には、若きマカリスターが「ヨーロッパで身につけたマナーと教養」はすでに、不用なものとなっていたことも、マカリスターの凋落の一因として付け加えたい。

『無垢の時代』は煌びやかなニューヨーク社交界の足元に潜む醜聞や人間の裏の部分を描いた作品として評価されている。ニューヨーク社交界にとって、ワード・マカリスターは、社交界を確固たるものとした人間であった一方で、決して崇めることを許される存在ではなかった。だからと言って、ニューヨーク社交界を描く際に、マカリスターの存在を無にはできなかったのであろう。ニューヨーク社交界に身を置きながら、作家の立場でニューヨーク社交界を描いた作家は少ない。イーディス・ウォートンはその貴重な存在である。そのウォートンが、マカリスターをモデルにした登場人物を作中で描いた。一人の登場人物として描き切るのではなく、あえて二人の人物に分けて描くことによって、マカリスターの功績と功罪を描くことができたのではなかろうか。ニューヨーク社交界の人々は、一度はマカリスターの目に留まろうと必死であった。彼は社交界に君臨するアスター夫人の右腕であったし、彼自身も、パトリアーク舞踏会など、社交の中心人物であった。しかしながら、自伝の発表とともに、社交界は彼を突き放し、無き者とした。その存在を、ありのままに認めることはできない。けれど、全く無き者にすることもできなかった。だからこそ、ウォートンも、社交界を書く上で、マカリスターの存在を無視することはできなかった一方で、その存在をあるがままに描写することもできなかった。このウォートンによるマカリスターの描写にこそ、ニューヨーク社交界の人々がマカリスターに対して感じていたであろう感情、つまり、マカリスターを軽蔑する気持ち、その手腕を一度は認めたはずが背を向けた後ろめたさなどの複雑な感情を読み取ることが出来るのだ。

**注**

1. Justin Kaplan, *When the Astors Owned New York: Blue Bloods and Grand Hotels in a Gilded Age.* (New York: Plime, 2007) 1.
2. Eric Homberger, *Mrs. Astor's New York: Money and Social Power in a Gilded Age.* (New Haven, Conn: Yale University Press, 2002) 149.　本稿における日本語訳は『無垢の時代』からの引用部分を除き、全て筆者による。
3. Greg King, *A Season of Splendor: The Court of Mrs. Astor's Gilded Age New York.* (Hoboken, New Jersey: John Wiley&Sons, Inc., 2009) 34.
4. Edith Wharton, *A Backward Glance: An Autobiography.* (The Curtis Publishing Co., 1934. [New York: Touchstone, 1998]) 58.
5. Rhoda Nathan, "WARD McALLISTER: Beau Nash of *The Age of Innocence.*" *College Literature.* (Baltimore, Maryland: The Johns Hopkins University Press, 1987) 281.

6．イーディス・ウォートン『無垢の時代』佐藤宏子訳（荒地出版社、1995年）275頁.
7．同、13頁。
8．同、14頁。
9．Nathan, 278.
10. Arthur T. Vanderbilt II, *Fortune's Children: The Fall of the House of Vanderbilt.* (New York: HarperCollins Publishers, 1989. [New York: William Morrow, 2013]) 90.
11. Ward McAllister, *Society As I Have Found It.* (New York: Cassell Publishing Co. 1890. [New York: Arno Press, 1975]) 67.
12. *Ibid.*, 116.
13. *Ibid.*, 239.
14. *Ibid.*, 78.
15. Jerry E. Patterson, *The First Four Hundred: Mrs. Astor's New York in the Gilded Age.* (New York: Rizzoli, 2000) 76.
16. McAllister, 214
17. *Ibid.*, 222.
18. Vanderbilt II, 97.
19. *Ibid.*, 98.
20. McAllister, 212.
21. *Ibid.*, 212.
22. "Secrets of Ball-Giving. A chat with Ward McAllister." *New York Tribune*, March 25th, 1888, page11, image11.
23. McAllister, 215.
24. *New York Tribune*, March 25th, 1888.
25. *Ibid.*
26. King, 34.
27. Vanderbilt II, 226.
28. Homberger, 19.
29. Vanderbilt II, 227.
30. *Ibid.*
31. *Ibid.*, 228.
32. *Ibid.*, 228-229.
33. ウォートン、『無垢の時代』、10頁。
34. 同、26頁。
35. 同、238－239頁。
36. 同、11頁。
37. 同、139頁。
38. 同、9頁。
39. 同。
40. Vanderbilt II, 93.
41. ウォートン、『無垢の時代』、43頁。
42. 同、92頁、198頁。
43. 同、255頁。
44. 同、229頁。
45. 同、43頁。
46. 同、36頁。
47. Vanderbilt II, 90.
48. *Ibid.*, 99.